

道内経済への貢献を 兼ね記念行事を開催

大型マンションや商業施設、医療施設、米軍施設内などの電気設備工事の施工管理を手掛ける六興電気（本社・東京都港区、長江洋一社長）が、創業66周年の記念イベント「DUNK」



参加者全員参加のクイズでは、開場が埋め尽くされた

全国19拠点・社員700人が「つどーむ」に集結 六興電気 が創業66周年 記念イベント DUNK を開催

東京本社、北海道支店をはじめ国内外19カ所に拠点を置く六興電気が、去る5月30日に創業66周年記念イベント「DUNK」を札幌市のつどーむで開催した。全国から社員700人が集結し、結束を強めた一日となった。



スポーティーな装いで挨拶する長江洋一社長

(Dairindorikai)を開催した。同社は1949年創業。創業者である長江健太郎氏が6人で起業したことから、社名を「六興電気」と命名

した。以来、「変わり続けるDNA」を理念に事業を拡大。今や北海道支店をはじめ、国内外19拠点、総勢750人の社員を抱える企業へと成長している。66周年にこだわる理由は、社名の「六」にちなみでのこと。創業66周年を迎える今年、まさにダブルシックスイヤーというわけだ。北海道を開催地として選んだ理由を「今回は社員の為のお祭りということで、普段なかなか訪れる事ができない北海道でおいしいお酒や名産の料理、観光などを楽しんでもらう事、また、社員の今後の励みになるような思い出をたくさん作ってほしいと選定させていただきました」と同社広報は説明する。

イベントは、大半を占める20〜30代の若手社員はもちろん、70代までの社員全員が楽しめること、社員間のコミュニケーションの向上、団結力や士気を高めら

れることなどを考慮して運動会形式とし、札幌市東区の「つどーむ」で開催する運びとなったもの。

今回のように、道外企業が社内イベントの開催地として北海道を訪れることは珍しく、「つどーむ」を運営管理する一般社団法人「さっぽろ健康スポーツ財団」にも問い合わせたが、過去にも実例はほとんどないという。道内経済の活性化という面においても、貴重なモデルケースといえる。また、同社では、これまでさまざまな社会貢献活動も実施している。一例をあげると、障がい者の就労支援などをおこなう社会福祉法人「太陽の家」（本部・



部署の垣根を越えてチームが一致団結。応援にも熱が入る



懇親会でおこなわれた新入社員による「未来宣言」



道産食材を堪能。穏やかな雰囲気での懇親会

大分県）と共同で、工用部材「36パインド」を開発し、障害者雇用の一翼を担っているほか、阪神淡路大震災、中越地震、東日本大震災の際には、自治体に救援物資を提供。義援金も送っている。

今回の66周年記念イベントにおいても、夕張市が実施している「幸せの黄色いハンカチ基金」に賛同し、個人寄付金を含む総額166万円を寄付。同市へのふるさと納税も社員に呼びかけてくれたのだ。

700人が結束し 大熱戦の運動会

イベント当日は、同社社

員700人が「つどーむ」に集結。支店間の垣根を越える8チーム編成で色分けされ整列する中、北海学園大学全学応援団チアリーダー部によるオープニングで開会式が開始。壇上に立った長江社長は「いよいよ66周年記念イベントが始まります。私のチームは平均年齢が高いですが、皆さんに負けないようにがんばります。今日1日けがに注意して楽しく過ごしましょう」と笑いか交え挨拶。会場は和やかな雰囲気包まれた。

ところが競技が始まれば一転、白熱した勝負が繰り広げられる。運動会恒例の玉入れ・大縄跳びなどのほか、「六興オリジナル」障害物リレー」では、「作業着早着替え」、同社オリジナルの運搬ケ

スを一輪車に乗せて運ぶ「通い箱運び」、電線を両肩に担ぎながらの「パン食い」、「空ドラムころがし」など、電気設備工事が主業務の同社ならではの内容に会場は応援に熱が入りながらも笑顔の交じる展開となった。

決が始まると、開場の熱は一気に上昇。大接戦の末、優勝チームが決定。上位3チームに道産物の賞品が用意され、優勝チームには夕張メロン、準優勝には毛ガニ、3位にはトウモロコシがそれぞれ100人分贈呈された。最後は菊地寛副社長の挨拶で幕を閉じた。

こうして約2時間半におよぶ競技が終了。大熱戦の勝利は、札幌パークホテルで開かれる懇親会でおこなう最終決戦「早食い競争北海道グルメフードバトル」に持ち越された。

札幌を拠点に活動する「橋本流北海勇み太鼓ジュニア」のオープニングアクトで幕を開けた懇親会では、坂本孝行常務が乾杯の発声。道産の魚介類など豪華な食事を堪能する傍ら、次代を担う新入社員が今後の飛躍を誓う「未来宣言」がおこなわれた。

「今回のイベントは、社員からの提案によるもので、企画もすべて若手チームがおこないました。相談を受けた時は「大丈夫かな」とも思いましたが、運動会や懇親会の盛り上がりで、そんな杞憂はどこかに飛んで行ってしまいました。当社社員、捨てたものではありません」と長江社長は誇らしげに語った。